少年少女のための

現代日本文学全集

1

幸田露伴集

責任編集
久松潛一
伊藤整
福田清人

少年少女のための現代日本文学全集 1

NDC 918.6

少年少女のための
現代日本文学全集1

幸田露伴集

定価 二五〇円

昭和三十年八月三十日 初版発行

一昭和三十三年二月一日再版発行

発行者 小嶺嘉太郎

発行所 東西文明社

東京都千代田区神田神保町二ノ二一

伊藤印刷株式会社
石毛製本所

この本を読む人に

すぐれた文学者は、この世や人間の、真実や美をするどくみつめて、その作品にはっきりとえがいてくれております。私たちは、それを読むことによって、私たちの心をゆたかに、美しくすることができます。

この本には、そうしたすぐれた作家たちの代表的な作品のなかから、さらに少年少女のみなさんが、読むのにふさわしいもの、ぜひ読んでもらいたいものを、えらんでのせてあります。そして学校で教わらないむずかしい漢字は、かなに改めたり、その意味をしるしたり、またかなづかいも、現代かなづかいになおして、みなさんにしたしみやすいようにしてあります。

その作品も作家のいろいろな面を示すようにしてありますが、あまりに長すぎて、この本にのせきれない作品や、もっとおとなになってから読んだほうがいい部分をふくむものは、その一部をとってのせてあるものもあります。その部分のとりかたもくふうして、その作品のあらましを知られるようにつとめました。

しかし、もちろん原作をこのように改めたといっても、原作の意図およびそ

の味わいなどは、できるかぎり、そこなうことなく伝えることができるよう苦心しました。だから実際は、このままを原作と考えても、さしつかえがないと思っております。

最後に、解説として、その作家の一生や、その作品の説明がつけられております。一つの作品をよく味わうには、それがどのような作家によって書かれたか、その作家の一生、ひととなりを知ることは、きわめてたいせつであります。それで初めに、解説のほうを読んでから作品のほうを読むことも、作品をよく理解することができる方法でしょう。

この解説も、それを書いた人々が、たいへん興味ふかく、親切にしるしてくれておりますので、きっと、作品を読むように、みなさんの心をひきつけてくれるでありましょう。

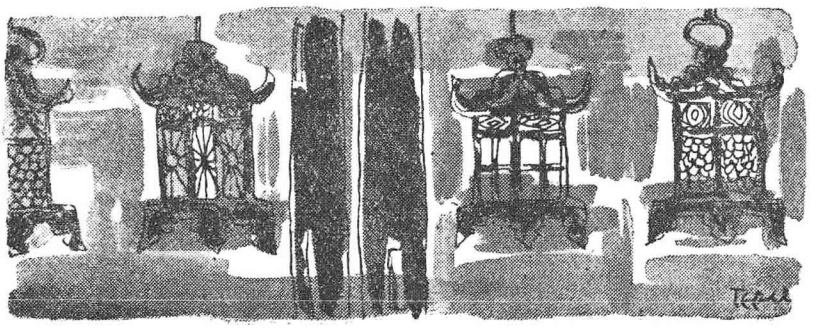
編集者　久松潜一
　　伊藤整
　　福田清人

★本文中、唐（むかしの中国の名）のように、かっこの中に小活字で入れてあるのは、編集部でつけた註です。

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbook.com

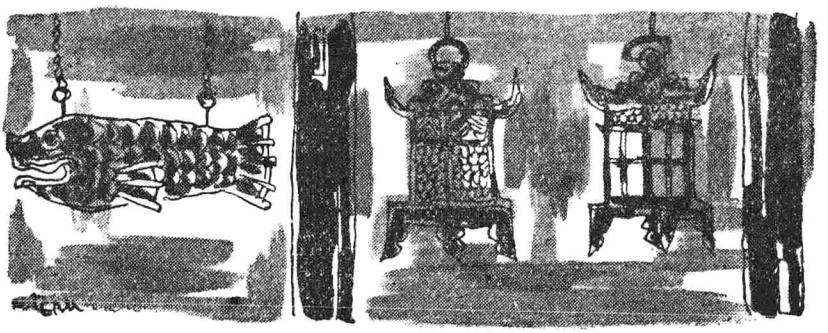
幸田露伴集もくじ

満寿姫……七
印度の古話……三六
露伴夜話……四三
五王子……五二
雁坂越……六〇
夏草（詩）……七八
五月雨（詩）……七八
山の一つ家……七九
番茶会談……八四



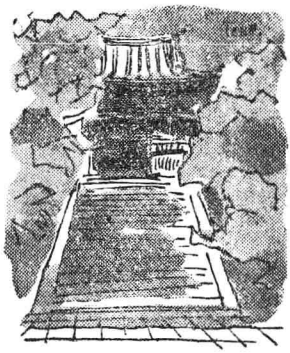
曾我兄弟……一五一
日本無双……一六一
前田利家……一七〇
浅き春の夕（詩）……一七九
もやし独活（詩）……一七九
芦声……一八〇
鵞鳥……一九四
解説　鹽谷　贊……二〇九

そうてい　青山龍水
口絵写真　土門　拳
カット　山本耀也



幸田露伴集

満寿姫



第一　鎌倉在片瀬村……七
第二　箱根山裏手……九
第三　鎌倉奥殿……一〇
第四　唐糸室中……一三
第五　奥殿廊架……一三
第六　信濃国奈良井宿……一五
第七　同……一九
第八　満寿辞家……二〇
第九　大姫部屋……二三
第十　大姫室中……二五
第十一　梶原邸内……二八
第十二　鎌倉営中……三〇
第十三　同北の御殿……三二
第十四　鶴が岡祠前……三三

第一　鎌倉在片瀬村

ひゃくしょう五作　義右衛門どの休まっしゃれ。とりいれは草取りとちがって、心持のよさとからだの倦まないのとで、思いのほかはかどるもの、きょうはあともう一ッきり精出してかりさえすれば、それでまアすむというわけ、さアたばこにさっしゃれ、ヤーイ権三も太郎も牛太、助十も休めやーい。

おのおの田よりいできたりながら、

義右衛門　牛太め、ふだんはのろのくせに、休みというといつでも一番にぬけがけするなア。

牛太　ハハハ、おぬしだって休みのきらいなほうでもあるめえが、ただおぬしはひゃくしょうかたぎなのだ。そこはこっちは鎌倉に奉公しただけあって、たばこ休みの一番やりじゃアない一番ぎせる、ぬけがけ功名、野らに出るたびに戦場にのぞむとおりの心得を日ごろすっかり持っているからだ。

五作　ハハハ、なんぞというと武家武家と牛太の武家がるも古いものだ、武家奉公したものは馬まで乗馬ッ返りといって悪功者でその実の働きはできねえ。

義右衛門　そうでがんす、むだ口ばかり達者で働きにかけたら役にたたねえ男たア牛太のことでがす、なるほど乗馬ッ返りたアよい見立てでがす、なア助十。

助十　ハハハ、こりゃアおもしろい、乗馬ッ返りの野郎。

太郎　オイ乗馬ッ返り。

権三　オイ乗馬ッ返り。

牛太　権三までおれをばかにするな、ゆうべもおれの話をおもしろがって聞いたくせに。ときに五作どん、こんどの鎌倉のご回状のわけを知っていさっしゃるか。

五作　庄屋どののきのうの話では清水の冠者、海野小太郎のご両人鎌倉の営中をしのびいでたまい、おゆくえ知れざるより、おありかを知ったるものはそのところところの地頭にとどけ出よ、ごほうびあるべしということだけだわい。

権三　その清水の冠者というはこのあいだ鎌倉様(源頼朝)にほろぼされた木曾義仲という者の子で、人質に来ていたのではないか。

牛太　それそれそこにわけありだわ。その冠者と鎌倉様のおひめ様の大姫君様というのとはいいなずけのご夫婦だが、木曾が朝敵になったので、お上でもだいじのひとりむすめを朝敵の子にやるのはおいやというわけだろう、また冠者の身になったら、親のかたきの家にいてむことなるのもおかしくなかろうから、それゆえかげをかくしたものにちがいないとおもうが、なんとおれなら世をしのび諸国をあるいて味方をあつめ、かたきうちの旗をあげるなア。

太郎　またほらをふくわ。てめえなら、おおかたためめめと大姫君様とやらの着物のすそにでもへばりついてばかりいるだろう。

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbook.com

五作　もうむだ話はやめやめ。みな精を出せ、いまひとっきりだわ。

おのおの立つ。

第二　箱根山裏手（夜）

清水の冠者義高　いかに小太郎、鎌倉の営中をいでてより昼はかくれ、夜はあるき、おぼつかなくもさして行く信濃の国はなお遠く、ようやくここは箱根山、追手をしのびて落つる身は、山禽野鳥の声におどろき、風の音にも胸をさわがす、さて口おしきわが運命、ゆくての道のくらさはよ。

海野小太郎　み心弱きことのたもうものかな、小太郎かくてあらん限りは、君を必ずご安泰に、木曾までおん送り申すべければ、お心強うおぼしめせ。さりながら旭将軍ともいわれしかたのご正統にわたらせたもうその君が、ふみもなれたまわぬ山道を、暗夜にただわれひとりを従者にてたどりたもうも頼朝ゆえ、おもえばにくき奸媒（悪いた）にてもったいなくも故将軍をば、朝敵ととりなし、粟津畷にご無念のご最期をとげさせたもうようせし上に、なおなおそれにもあきたらで、身をつつしみて鎌倉につゆの罪なくいたまいし、わが君をまでなくせんと、床下にやいばをふせ、わん中に毒をもる腹のきたなさ。神明君を加護したまえば自然とたくみのあらわれて、からくも無事にましましたれど、安心ならぬ虎口針の座、ようやく脱したまいたれば、これよりはきもをなめたきぎにふし、うらみをかえす手だてをめぐらし、あの頼朝めを。

義高　不覚なり小太郎、言うて詮なし、言うて詮なし。

小太郎　ハッ、いかにも。道を急ぎていざご案内つかまつりましょう。

ふえの音聞ゆ。ふたり立ちとどまりて身がまえす、しばらく無言。音絶ゆ。

小太郎　ええつちうそめにおどろかされたかいまいましい。わが君、あれは雨をよぶつちうそという鳥の声、ふえの音ではござりませぬ。

またあゆみかかる。うしろ杉立の中よりやりつっかくる。

小太郎さくる。

石田太郎為久　木曾の小冠者にぐるなかれ。生かしおい

ては寝ざめあしきおのれらふたりを、打って取れと鎌倉どののおおせを受け、所々をさがして今ここに、見つけいだせしわれこそは石田の太郎為久なり。親義仲は粟津畷でわが矢にかけて殺したり、冠者おのれもその縁でわが手にかかって往生せよ。

石田の郎党おおぜいふたりを囲む。義高顔色変わる。

義高　石田の太郎為久とな、聞かずばともかく聞いては許せず。きたなきおのれが遠矢にかけられたまいしわが父上のご遺恨は、今わが胸に烈火と燃ゆるわ。おのれが血しおでこれを消さずばいつがは消えん、そこのくな。

為久　フフフこしゃくな、それかかれ。

いっせいに打ちかかる。義高はげしく為久にせまる。小太郎、石田が郎党と戦う。義高きずつきながら為久が肩先を切りこむ。

第三　鎌倉奥殿

腰元らおおぜい、頼朝の室政子に侍して坐す。

唐糸きたる。

腰元唐糸　わが君ほどなく入らせらるべし。

源頼朝、便服、扈従をしたがえてきたり坐す。みなみな礼す。

政子　わが君さまにはごきげんいつもうるわしく恐悦至極に存じたてまつりまする。

頼朝軽くうなずく。

頼朝　菊野は残れ、余はみな立て。

腰元らみな立ち去る。

頼朝　近う近う。

政子座をすすむ。

頼朝　聞け政子、天下はようやく静謐なれどもわが家をうかごう者なお多く、平家の余類、木曾の残党、うらみをふくみて所々にかくれ、ひま（す）あらば事をなさんとはかるもあるべく、まった奥州の秀衡、泰衡はいまだわが威になびく色なし。そなたはなにと思うか知らぬが、まくらを高うしては休みがたし。さりながらこのうれいをばそなたがひとつの働きにて除き去るべき手だてあり、そなたはそれをよくするか。

政子　ようするかとのおんたずねは、はばかりながらわ

らわにとり口おしいことに存じまする。いかなることか存ぜねどよきもあしきも源家のため、わらわの力のおよぶ限りは。

頼朝　満足満足、よく答えたり、さらばそなたに任せたるぞ、むすめ大姫を説きふせて入内するよう承知させよ。任せたるぞ。

政子　入内とおおせあるは。

頼朝　申すはおそれ多けれども、一天万乗の君(天皇の)のきさきとわがむすめをばすすめん所存、大姫さえ承知せば大内はわが思うとおり、さらにこしょうのあるべきようなし。

政子おどろく。唐糸ふすまの外にしのび寄りてぬすみ聞く。

政子　これはまたふしぎなるおおせ。さかずきこそさせね大姫は、冠者義高が妻と定まりあるものを、入内とはそもいかなるわけか、お聞かせなされてくださりませ。

頼朝　そのようなこと問うにおよばず、姫承知して入内すれば義仲が子の小冠者めに連れそうよりはその身の幸い、またそなたにもわれにも面目、してわが家は天子のお身内、さするときにはわが家にむかって弓引く者はみな朝敵、自然源家のいしずえ固まり、一寸ゆるがぬ世となるべし。

政子　それはまことに喜ばしけれど、ゆくえ知れざる清水の冠者はいかがなさるるご所存か、姫は冠者をしきりにしとうて明けくれこがれおる様子。

頼朝　冠者はすでに箱根山にて石田の太郎為久がため、誤って底知れぬ谷あいにおとし入れられしよし。為久きわめて不覚なれば昨日切腹申しつけたり。冠者のことには気づかい無用、されど姫には義高が死したることをもらし聞かすな。

政子ますますおどろく。唐糸面色変わり、頼朝の方をふすまごしににらむ。

政子　はて心に落ちぬ冠者の最期。

頼朝　いや気づかうな、たしかに死したり。

政子沈思、頼朝黙然、菊野端座するのみ。

政子　菊野、大姫に伝えよ、わらわが来よと言いしと。

菊野　かしこまりましてござりまする。

菊野立つ。唐糸うなずき去る。菊野立ちいずるとちゅうにて唐糸のうしろすがたを瞥見して、あやしみ見送る。

第四　唐糸室中（夜）

唐糸手紙をしたたむ。

唐糸　葉末、葉末。

婢葉末ふすまを開き室に入る。

葉末　めしましたでござりまするか。

唐糸　おお、そなたは気心知れたる者ゆえ、だいじの用をこの唐糸が今おりいってたのみたいが、なんと聞いてはたもるまいか。

葉末　これはまた改まったおことば、なんなりとだんな様のおおせをそむくような私ではござりませぬ。

唐糸　いつもたのもしきそなたの親切、ほんにうれしゅうおもうぞよ。たのみというはほかでもなけれど、そなたはこの鎌倉の者といい、かねてそなたの兄のあるということも聞いているが、これただ一つをそなたの兄かただしはそなたが知り合いのじっていなる男をたのみて、信濃の国の奈良井の宿へ持たせてやってはたもるまいか。もちろん少し子細あってこの唐糸がたのみとは知れぬようにしたきつもり、それゆえそなたをたのむわけなればたいぎながらこれよりすぐに。

葉末　何かと存じましたれば、なんの、何よりおやすいご用、ついちょっと行ってまいりましょう。

唐糸　ああこれこれ、そうかるはずみせぬように、それからこれはわらわがたのみをうけ合うて行くものへの路用に、それからあのこれは用い古したるものなれども、日ごろやさしくしてくるるそなたに、かねてやろうと思うていた鏡一面。

葉末　おことばのうちなれど、どうやら長いお別れでもいたすときのようなおおせごと、いただくのはありがとうござりまするが、それはいつでもよろしいものを。

葉末、唐糸の面をあおぎ見る。唐糸かまわず状箱、鏡、包金など取り出して葉末が前に置く。

唐糸　これは葉末としたことが、そのような言わいでもよいこと言わずと、まアだまって受け取っておきゃれ。思い出したとき言うておかねばわするがわらわの常ゆえ、今おもい出したまま言うただけのこと、気にか

けずと納めてくりゃれ。

葉末　さようならばありがたくちょうだいしておきまするが。

ふたたび唐糸の面をうかがう。

唐糸　今のことはしかとたのみましたぞ。

葉末、状箱等を受け納む。

葉末　かしこまりましてござりまする、さようなればちょっと行ってさんじまする。

葉末室内をいで、

葉末　どうやらふしぎな。

うしろをかえりみる。唐糸はしばらく黙然。

唐糸　信濃にいたもう母上およびわが子に最後の手紙も出したり、思いおくことさらになければ、こよいは過ごさじお主のあだ、わが夫のあだ、兄のあだ、近くは思うにたぶんまた義高君をもはかってなくせし、あの頼朝めを一太刀うらみて。

短刀を取り出して燈下に見る。

唐糸　なにほどたくみにたくむとも、世にはたくみをあざわらう唐糸ごときおろかしき女のありて、たたむ間もなき足もとにたちまち起り、分別知恵もなきだけになおするどくたくみをくじきて思い知らせん、鎌倉の様子をばさぐらんために入りこみしそのかいもなく、きょうまではつゆおしからぬ命をのべしが、待つにかいあるこよいの酒宴、万々一の望みをつなぎし義高君をさえはかりて、大姫君をも入内させんとあくまでかしこき我欲のやっこに、ホホホ、問うてみようぞこのやいばを、なんのたくみでどうするものぞと。ホホホ。

がきたりて燈火を打つ。

第五　奥殿廊架

唐糸燭をとって先に進む、頼朝扈従とともにこれについて行く。唐糸しばしばうしろをかえりみる。

頼朝　唐糸、なんとてそちは二たび三たびあとふりむきてわれを見る。

唐糸　エエ、あの、なんの、なんの子細もござりませぬが、お庭のまつの葉ごしに見ゆる五日の月の美しさ、アレごろうぜよあの月の、美しきゆえ心をひかれ、思わずたびたびふり返り。

とうしろのかたを指さし示す。頼朝および扈従あとふり向くひまに唐糸早くあたりを見まわし、人なきにうなずきて懐剣をぬき背にかくす。とたんに頼朝唐糸を見る。

頼朝　月はあれどもうす雲に、たちこめられてあながちに、美しきとも言いがたきに。

唐糸燭を投げうって頼朝のたもとをとらゆ。頼朝おどろきあやしみてさけんとするにそのまませまりながら、

唐糸　あざむくことはそのごとし、人をばあざむきうるとても天をばわらわもあざむきえず、君はたくみに天下をいつわり木曾どのをほろぼしたまいたれど、人の知恵ではおおえぬ天道、今現われて唐糸が女ながらもお首をぜひにちょうだいいたしまする、いまさらいずれににげたまう。

頼朝狼狽。

頼朝　くせ者め。

唐糸つっかくる。頼朝身をおどらして地上におり、そでのみ唐糸が手に残る。

扈従　ろうぜき者。

唐糸なお頼朝を追う。扈従これをとどめんとして唐糸がためにささる。月光弱し。頼朝木の根につまずきたおる。唐糸ふたたび追いすがってすでにささんとするとき、かけいできたりし腰元小篠うしろよりだきとむ。唐糸電撃雷呵、これをたおすひまに頼朝のがる。唐糸なおこれを尾する横あいより腰元菊野政尾ふたりあらわれ、なぎなたを取ってさえぎる。政子大姫および腰元らおおぜい、あるいは燭を取り、あるいは武器を持していできたり、頼朝を守る。菊野ついに唐糸が乞首を打ち落す。おおぜいこれに乗じ打ち重なって唐糸を縛す。

頼朝　着る物たがえばすなわちほゆると、むかしの人の言いすてたる小犬のごときおろかのものめ、おのれは木曾の余類ならんが、われ平家を攻め討ちしも、同じ源氏の木曾を討ちしもみな頼朝の私（自分だけの考え）ならず、ともに一天万乗のみかどのおおせを受けてせしこと。木曾は朝敵、われ討たずともとより自滅すべき道理。さるにわれをばうらむとはさてあわれむべき女の了簡、善悪邪正に暗きゆえなり。ハハハ、はてきのどくのひが心得、くやみて早くありていにその身の素性来歴より、なんじをここに入りこませてわれをはからんとせ

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbook.com